

## 山行報告書

受付 No.	268	登山地・ルート	五竜岳～遠見尾根より（中遠見山まで）
目的	冬山に向けてのトレーニング		
メンバー	大山、坂野		
行動記録			

月 日 曜	天候	ポイント地点・所要タイム
12・8・土	雪	浜松＝道の駅白馬＝白馬五竜スキー場＝アルプス平＝リフト終点～小遠見山～中遠見山 9:00 11:48 13:15
12・9・日	雪	ビバーク地～中遠見山～小遠見山～リフト終点～アルプス平＝スキー場＝浜松 8:15 8:29 10:23 12:20 12:35

### 記事 目的の成否・状況・問題点(反省)・メンバーの状況・ルートの注意点・自然状況

白馬の道の駅で仮眠。起きると雪が舞っていた。スキー場に移動して8:15のゴンドラの始発を待つ。ボーダーが多かった。リフトを乗り継いで輪かんを着けていると他の登山者も上がってきた。最初からトレースはなくラッセルとなる。先週の爆弾低気圧の通過によるものか積雪は多かった。最初だけラッセルをしたが、坂野氏に交替するとラッセルする坂野氏に追いつけない。後ろをよろよろと歩いていると、後続で10人くらいの集団に追いつかれ「交替しますよ」と言われてよける。しかし坂野氏はその先もしばらくラッセルしていた。その中にクライマーの佐藤裕介氏がいた。集団は小遠見山まで上り、あとはその付近で雪洞訓練をするらしい。小遠見山から先は先行した佐藤氏のトレースがあり、坂野氏が追いかけるように進んで行く。叩きつけるような風雪に時折足が止まり、坂野氏の姿も雪煙の中に見えなくなる。悪天候は承知で入山したが、どこまで突っ込んで行ったものか思案しながら歩いた。中遠見山まで達して少し下った辺りで行動終了することにして、トレースから少し外れた尾根上の樹林帯にテントを張ろうとしたのだが、テントを立てて外張りをかけ、張り綱を固定している最中に強風でテントが舞上がった。慌てて押さえたところ、パキッと嫌な音がした。ポールが折れたらしい。坂野氏が「じゃあ雪洞掘りましょう」とすかさず言う。切り替えはやっと思うがこの風雪にさらされた状況の中ではそれしか生きる方法はない。尾根の風下側に下り斜面を切って穴を掘り始める。1メートルくらいで地面に突き当たり、左右に広げる。それぞれ自分の部屋は自分で掘り、雪洞の入り口はテントの外張りで塞ごうとするが、雪面の雪はやわらかく竹ペグの固定ができない。あまり深く入れると雪洞に穴を開けてしまうし困った。最終的には補助ロープを渡してそこに外張りを固定して入り口を塞ぎ、下を雪で押さえた。雪洞の中に入ってみると外とは別世界だが寒いのは寒い。そして坂野氏の部屋と自分の部屋の居住性を比較してみて随分差のあることに気付く。自分は天井を薄くするのが怖かったので床を嵩下げしたのだが、雪が部屋に入ってくる。一方、坂野氏の方は入り口に対して床が高く、天井も高さ確保していた。そして入り口の向きのせいもあるかもしれないが、隙間風が自分の部屋の方に流れ込んできて寒かった。床も奥のほうへ傾斜していて居住性が非常に悪かった。坂野氏の部屋が人間の居室だとすれば、自分の部屋はまるで動物の巣穴のようだった。次は気をつけようと思う。中に落ち着いて携帯が通じることに気付くが、1月の鋸岳でのビバークの際に軽い気持ちでビバークなうのメールを遭対委員長に送って想像以上の心配をかけてしまったので今回はやめておくかという話になった。しかし今回こそ万が一雪洞が埋まった際の会の行動を考えれば現在の状況を伝えておくほうが良いという考えに変わって坂野氏から現在地のメールを送った。夜は寒いのと天井の雪の中からぎゅっぎゅっという重み加わるような音が聞こえて非常に恐ろしく、いざという時にシュラフを破るためにナイフを握り締め、天井が下がっていないか何度もライトを照らして確認した。

翌朝、雪洞に異常はなく無事に起床時間を迎えることができた。雪洞の中は本当に静かなのに外は昨日と同じく風雪が激しい。当然撤退であるが、昨日からの湿雪が数十センチ積もってラッセルが重い。ビバーク地から中遠見山まで、夏なら3分とかかからない距離と思われるが15分くらいかかった。小遠見山とのコルに下る辺りで向きが変わったので方向を確認してみると南東に派生する尾根に向かいかけているようで修正

が必要なようだが進むべき方向にそれらしい尾根がない。ガスで視界はなくとりあえず尾根らしい所を下りかけたところ、一瞬ガスが薄くなって遠見尾根が見えた。トラバースしてコルに至り軌道修正できたが、一旦のぼり返して方向確認をするべきだった。小遠見山への上りの手前で休憩していると佐藤氏の2人パーティが追いついてきた。昨日は大遠見山まで達したらしい。2人が先行してくれたのでトレースがついた。小遠見山からの稜線は風が強く、佐藤氏パーティのトレースさえ埋まっている感じだった。稜線から下るとトレーニングに来ている人たちが賑やかにラッセル訓練をしていた。地蔵の頭への登り返しを何とかこなしてあとはスキー場の隅っこをボーダーに気をつけながら下りゴンドラ乗り場に至る。駐車場の自車は完全に雪に埋まってオブジェと化していた。

紙面不足の場合は裏面へ

報告者	大山	受付	平成	年	月	日	受付者	
-----	----	----	----	---	---	---	-----	--



地蔵の頭を過ぎた辺り



中遠見山の辺り



雪洞ビバーク中…



遠見尾根へ軌道修正のトラバース